

蛇

スチャート・サワッシー

訳 宇戸清治

闇夜——月明かりのない闇。いつもはキラキラと輝いている星屑の光もいまはない。空は地平の果てまで雨を含んだどす黒い雲によって覆い尽くされ、あれほど注がれていた月光を遮って、いまは地上に完全な闇をもたらしている。年の暮れの季候はいくらか暑さが緩んだように見えても、小さな家に暮らす女には必ずしもそうは感じられなかった。

彼女はいま恐怖のただ中に置かれていた。全身の毛穴から冷や汗が吹き出し、手と足の先は冷たくなり、心臓は激しく動悸を打っている。

向かいにある隣人の家までの距離は、それほど遠くはない。しかしいまの彼女の感覚では、その間隔は声をあげて呼んでも聞こえないほどの遠い距離に思われた。いまだは彼女と隣人の間は洪水によって途絶され、その距離は冥王

星ほどに遠くなつた気がした。どの方向を見ても、見えるのはただ水だけだ。しかも褐色に濁つた汚い水。いまは自分のことだけを考えたいほど弱気になっているのに、本当に必要な場合以外には隣人の誰も自分を助けようと軒下から出てくることはないことを彼女は熟知していた。彼らはみな濁流をかき分けて渡るよりも、己の水上楼閣に安住することを望んでいる。膝上ほどもある水嵩の中をあえて渡つて助けに来る人間などいるはずもない。彼女は憂鬱な表情で窓外の光景を眺めた。遠くでギザギザした閃光がピカッと光つたかと思うと、すぐに元の暗黒の空に戻つた。反対側の岸边にある隣人の家のラジオからチンナコーン・クライラート「二九四六〜二〇一七。一九九四年にタイ国芸術家（歌手部門）」の歌うルークトウン「タイのカントリー音楽」の曲がかなり大きな音で漏れ聞こえてくる。女はその音がうる

さく感じられ、怒りさえ湧いてきた。いまの彼女に欲しいのは助けであつて、音楽などではないのだ。それが誰の助けであろうとかまいはしない。友人であろうと隣人であろうと、あるいは町での勤務に出かけたままの夫が急遽帰つてきてくれてもいいのだ。彼女は遠くないところで明滅しながら移動しているものをじつと見つめた。それは時には近づいているようにも思え、時には遠ざかつていくようにも思えた。魚を捕るために照らされている明かりかもしれない、もしかしたら闇に紛れて身を潜めている外来の野獣かもしれない。あるいは、遠くから汚い塵を運んできて扉の前で堆積させ続けている濁流が光を反射しているのかもしれない。

もしもその野獣が人間だとしたらと思うと、彼女の心臓はどくどくと脈打った。新聞にレイプの大見出しが載っている光景が頭をよぎる。

細身の身体でそんな想像をしたせいで恐ろしくなつた彼女は、水溜まりの中をそろそろ歩き、一階の部屋の、水嵩よりは高い場所に据えられたテーブルの上に乗った。警戒のため、懐中電灯の光を部屋の隅々や風呂場周辺の暗がりに何度か当てる。それから上着のポケットに手を突っ

込んで、家に一つしか残っていないマッチ箱を落としていないことを確かめた。戸棚に立てられた二本の蠟燭がころうじて弱々しい光を放っている。蠟燭の炎は扉の隙間から侵入する風のせいで絶えず明滅している。

そうなのだ。あいつはあの扉の上部の隙間からも易々と這つて侵入することができる。場合によつては天井の横木の隙間にそつて移動するかもしれない。そうやって人知れず侵入し、見えないところに潜んでいる可能性がある。雨がしとしと降り、停電になり、付近一帯が水浸しになる夜はそれが一番の心配事だ。

時間が経つても女の置かれた状況に変化はなかった。女は気が塞いで落ち着かず、まるで悪夢から覚めたばかりのように目を閉じてあれこれ考えた。いまに至るもまだ彼が帰つてくる気配はない。

朝方、彼と彼女はまだお互いに冗談を言いあつて笑いこぼれることができた。仕事に出かける前、彼はいつものように彼女に告げた。

「じゃあ、行くよ。もし夕方何か用事ができたら帰るのが遅くなるかもしれない」

「暗闇で洪水の中を歩くのは、蛇がたくさんいて恐いわよ」
彼女は深い考えもなく言ったつもりだった。

「かまうものか。そいつをポケットに突っ込んで君にプレゼントするよ」と彼は冗談めかして言った。

「バカね。ポケットにしまったままにておいて。私をからかったりして、ひどい人。この付近では毒蛇研究所の人たちが飼育用の蛇を放し飼いにしたって村の人が言っているのを聞いたことがあるでしょう」

「さあ、どうなのかな。でまかせじゃないのか」

彼女はその時は確信が持てないにもかかわらず、自分を励ますために笑顔で夫の言葉を受け入れた。本当に心配だったら、そんな話を持ち出さないことは自分でも分かっていた。彼女は夫が靴を手にぶら下げ、片方の手でカバンを携えて水溜まりを歩いて行く姿を見送った。長ズボンの裾はめくられていたが、所々の場所は短パンの裾くらいまでの深さがあった。

夕方、ほかのことはとにかく何も考えないことにした。彼女は水の中を歩き来して、いつも通り床下の台所で夕食の支度に取りかかった。台所をはじめ一階の部屋はすべて床がセメントになっており、台所と部屋は壁で仕切られて

いる。一階の半分は客間である。セメントを覆い隠すように押し寄せた洪水の水高は、いまではふくらはぎの半分ほどの高さまで達していた。一階に隣接しているトイレは台所の地面より低い位置にある。彼女は板を持ってくると便座にそれを被せて水の浸入を防いだあと、ドアをかたく閉めた。

台所へ戻ろうとほんの少し水の中を歩いたその時だった。彼女はハツと息を呑み、呪いをかけられたかのようにその場に立ちすくんだ。かまどから一メートルも離れていない場所に、頭部が黒く、赤と白のまだら模様のある胴体を持った蛇がすべすべした身体をねじりながら這っているのが見えたのである。それほど大きな蛇ではなく、停電で止まっている水汲みポンプの上をゆっくりと這っていた。

女は驚いた。裏の勝手口のドアは閉めてあったはずなのに、この醜い動物はおそらくどこかの隙間から侵入して、かなり長い間ここに潜んでいたに違いない。それまでの恐れがいざ現実になってしまったいま、彼女の心は驚きと恐怖で凍りつかんばかりだった。それでも心の片隅ではまだ完全に運に見放されたとはいえないかもと自らを慰める、矛盾した気持ちもあった。いずれにせよ、目の前にいる、

人が悪運の象徴だとする爬虫類に運勢を重ね合わせるのは、この場面には相応しくない考えだった。もしこの場に夫がいたならば大声も出しただろう。だがいまはどんなに大声で叫ぼうが、誰にも聞こえはしないだろう。たとえ聞こえたとしても、なんだそれしきのこと、やっつけられないよと言って、近所の人はほんの僅かな関心すら寄せないに違いない。それが分かっていた彼女は、大声をあげて他人に迷惑をかけるのを憚るかのように、ただ軽く「おっ!」と口にしただけだった。激しく動悸を打つ胸に手を当てたまま、彼女は炊飯器を下ろすために、ゆつくりとかまどに近づいた。視線は毒蛇をしっかりと捕らえたままである。かつて田舎の実兄から聞いた言葉が胸によみがえる。「グクサリヘビ」「体長が短く、頭部と胴体の大きさがほぼ同じ蛇」と呼ばれている蛇は、身を丸めると金槌を投げるように素早く跳びかかって獲物を襲うので、避けるのが困難だ」と兄は語っていた。そのクサリヘビという蛇がどんな姿をしているのか、目の前の蛇がそうなのかどうか、彼女にはどちらも分からなかった。とにかくいま、その恐ろしい爬虫類が自分の身を隠せる穴か適当な場所を探そうと、水汲みポンプの上で頭部を左右に振りながら這っているのは事実なの

だ。彼女はもう一度蛇を見ながら、もしかしたら相手も同じように驚き、慌てふためいているのかもしれないと感じた。あるいは、蛇という動物は地上の動物の中でも美しく、かつ畏敬すべき存在なのかもしれない。だが長い時間かかつて人間の意識に埋め込まれた恐怖の本能によって自己撞着を起こし、その結果、人間は本質を理解することなくすべての蛇を恐れるようになったのかもしれない。そしてその恐怖が人間と蛇が遭遇した際に両者に驚きをもたらすのだろう。彼女とてもその例外ではなく、蛇の方もまた同様に彼女を恐れているのだ。その恐怖ゆえに、蛇はいつでも戦えるようにと首をもたげる。

女は夕食を作るのを諦めた。全身の毛が恐怖で逆立っているのを感じる。彼女はかすかな息づかいをしながら手を伸ばして杓子を掴むと、大きな音で蛇を追い出すためにテーブルを叩いた。しかし侵入者にはその行為の意味が理解できなかつたようで、彼女がテーブルや水瓶を叩いたり、鍋を軽く叩いたりするほど、蛇の方はますます怖じ気づき、ここからどこかへ逃げ出して欲しいという彼女の意図が分からないようだった。

最後に、蛇は水汲みポンプのモーターの中へ入って身を潜

ませた。

女は解決法を探すため、何か助けになるものはないかと周囲を見渡した。彼女は後ずさりすると、裏手の勝手口のドアを開けた。助けを呼べる人がいないか探そうと思つたのだ。彼女の目が、二、三人の若者がそう遠くないところで水の中にいる姿を捕らえた。あるいは魚を捕まえようと罾を仕掛けている最中だったのかもしれない。とっさに、お願いしたり、小遣いをあげるからと言って頼めば助けてくれるかも知れないという考えが胸中をよぎつた。しかし、もし彼らが毒蛇に噛まれたら、一体誰が責任を取るようになるのか。そう考えて、声をあげて助けを呼ぶことを諦めた。彼女は自分の身を守るために手にびつたりくる棒を探すことにした。幸い台所の壁を作る時に余つた一インチ角の角材があるはずだ。大した太さではないが、何も手にしていないよりはましだ。

え？ ドアを出ると、外はほとんど何も見えないくらい暗かった。それが分かると彼女は大慌てで勝手口のドアを閉めた。はじめは逃げ道になるようにと勝手口を開けっ放しにしておこうと考えたのだが、蛇が這って出て行く様子はいつこうになく、安全だと考えた場所に身を潜めたま

まである。そうなんだよね、と彼女は考えた。最近では危険な生き物はなにも毒蛇だけとは限らない。まだ気づいていない危険がほかにもあるのだ。彼女は勝手口にしつかり鍵をかけると、足で水をかき分けるようにして進み、食器棚につかまつた。そして足が水に浸かつた状態のまま水汲みポンプの方をもう一度確かめた。あの獐猛な動物がまだ新しい隠れ場所に満足しているかどうか見当がつかなかった。彼女はまた考えた。彼女が窓を閉め切つたのは夕暮れ時だが、その前にほかの蛇も家の中に侵入し、いまでもどこかに潜んでいるかもしれない。いろんな場所に何匹も固まつて。ああ、なんてこと。あるいは彼女は気にしすぎなのかもしれない。蛇、蛇、蛇……。彼女はひたすら蛇のことばかりを考えた。もつとほかに危険な生き物がいるかもしれないのに。

いずれにせよ彼女が最後に決断したのは、部屋の隅々に蠟燭を灯し、懐中電灯とマッチを常に手放してはならないということだった。こうしている間にもムカデやトツケー「オオイエヤモリ」やサソリやヤモリに出くわす可能性がある。女はそう考えたので、わざと音を立てて水の中を歩き回つた。もし本当にそれらの生き物が潜んでいたら、追い出

す効果があるはずだ。あるいは音を立てることで不気味な静けさを追い払うことにもなる。

探していた角材を手に入れると、彼女は蛇の動きを監視するためにもう一度台所に戻った。その時の彼女には大きな危惧があった。その犖猛な生き物が居心地が悪くて這い出し、彼女には分からない別の場所に隠れた可能性がある。そう考えただけで彼女の足は凍りついたように止まった。慌てて足の周囲の水溜まりを懐中電灯で照らす。水は濁っていて自分の足先もはつきりとは見えなかった。水が澄むのを待とうと静かに立っていた。その間も、横木にぶら下がって頭を垂れた毒蛇が舌をちよろちよろ出し、いまにも自分を襲おうと身構えている気がした。彼女はあわてて天井に懐中電灯を向けた。あるいは、もしもあの蛇が民話や映画のように人間に化けたとしたら、自分は一体どうするだろう。そうなのだ。もし本当に必要ななら、蛇が人間に化ける所を見せてくれた方がずっとましだと頼むだろう。でも本当かな。自分はどうして確信を持っているのだろう。それが良い蛇で、姿を変えて現れたあとで国を造る竜王であるなどと、自分にどうして分かるだろう。それに、相手もし悪い蛇だった場合、自分はシンハ

クライポップ物語「ラーマ二世時代初期の詩聖ストーンプーの作品」のように、変身して逃げるための薬草を探し求めに飛び立てるだろうか。でもここは自分の家だ。もしかしたらテレビモニターの中に逃げ込むかもしれない。女はそんなことを絶えず考えながら、増水した結果いまではふくらはぎまで達した洪水の中で少しづつ歩を進めた。心臓がどくどくと脈打つ。

その時までには、周囲のすべては闇に包まれていた。

パチパチ！ 激しい雷雨による停電で何時間も消えていた電灯が突然音を立てて灯った。毒蛇という大きな問題はいまだ未解決とはいえ、それでも彼女は大いに安堵した。彼女はそれまでは関心がなかった水汲みポンプを見た。彼女が以前に夫がいらいらした様子でそれを修理するのを見たことがあった。端から見てもその作業はかなりきつそうだった。件の水汲みポンプはコンプリートの台座に据えられていて、いまも増しつある洪水の水嵩より少し高い位置にあった。この機械は間違はなく鉄製だ。だとすれば停電が終わって通電した場合、水に浸かった機械は漏電するのではないか。彼女はごく自然にそう考えた。彼女はあわ

てて水から足を抜き、すぐそばのテーブルに上がった。恐怖のせいで身体がブルッと震えた。これでは何時になっても下には降りられない。彼女はもう一度考えた。もし、感電したならばあの邪悪な蛇も死ぬかもしれない。あれだつて生き物だし、あの身体だつて水に濡れているはずだ。そうだ、その手を使おう。彼女は手にしていた角材を伸ばすと、先端を使って安全ブレーカーのスイッチを入れた。ブルン、ブルン……。水汲みポンプのモーターはすぐに回転を始めた。その振動音は息をうまうまできないようにスムーズではなかった。音はいつもスイッチを入れた時の慣れ親しんだ音とは違って、何かがつかえているような音だった。その時だった。機械の中で立ち往生したあの蛇がゆつくりと真つ黒な頭をポンプからのぞかせたのだ。

女はぐずぐずしなかった。彼女は手に握りしめた角材を勢いよく毒蛇めがけて打ち下ろした。ポンプを壊したり、感電するかもしれないという恐怖を忘れたかのように。

最初の狙いは外れた。しばらく観察していると、あの気味の悪い真つ黒の蛇がもうどこにも隠れ家がないことを悟ったかのように、のろのろと這い出てきた。今度はその姿をはつきりと捕らえることができた。見れば見るほど

その醜悪な姿に嫌悪感が湧いた。そこにこれでもう終わりするんだという気迫が入り交じった。お前を殺す。彼女はまた角材を振りかざすと、力一杯蛇の身体めがけて振り下ろした。バシヤツと水が飛び散った。お前を殺す。今度は蛇の胴体の真ん中に当たった。何度も何度も振り下ろした。当たることもあれば、外れることもあった。最後には握り締めた箇所で角材がボキッと折れた。闇を好む邪悪な生き物は胴体をくねらせ、黒と赤と白のまだら模様の胴体が水汲みポンプと台所の壁の間の隙間に落ちた。水はまだそこまでは達していなかった。もしお前が私を噛んだら、お前も私と一緒に死ぬんだ。彼女はその運の悪い毒蛇の胴体から血が流れ出ているのを見た。血の色は赤かった。彼女は親指と人差し指の間の股に鋭い痛みを感じた。角材の棘が肉に食い込み、彼女自身の赤い血もまた流れ出していた。私たちは一緒に死ぬんだ！

女は悪を超えたある種の力を得たように感じた。恐怖は快感に変わった。快感は全身を駆け巡った。それから数回角材で叩き続けるとさすがに疲労を感じ、真つ直ぐに立っていられなくなった。蛇の身体の震えが角材を通じて彼女の身に伝わってきた。角材を染めた蛇の血が、角材を

握っている彼女の手の血にまで連なっている気がした。しばらく時が過ぎたところで、女は身を乗り出して戦いの成果を確かめた。蛇は上がってきた水の中に静かに横たわっていた。胴体の一部は潰れていたが、それでも水中でまだもがいているように見えた。彼女はその死に確信が持てなかった。横たわったその姿からは、蛇が彼女をじっと見ているように思えた。あるいは少し微笑んでいるようにすら思えた。彼女は自分が変身して、頭や背中や鎌首やうなじや円錐形のえらから流れ出ている血と一体化する心持ちがした。彼女の唇は朝の夜露で濡れたように湿っていた。蛇の密かな微笑みは、目が覚めることで終わる悪夢と変わらず、現実のことではないように思えた。

女はすべての快感が冷めていくのを感じた。雨がばらばらとトタン屋根に音を立てて落ちている。それはどこか音楽のリズムにも似ていて、眠気を誘った。蛇の死……。それはほんの小さな死に過ぎない。そしてそれをもって蛇と女の両方の死は終わるのだ。

女は視線を落とした。呼吸が乱れて、胸一杯に息を吸い込むことができなかった。それはとてもきつい苦しみだった。死ね、早く死ね、蛇よ。

女は急に吐き気を催した。涙がこぼれてきた。彼女はそこに座り込んだまま蛇が息絶えるのを見届けた。

テキスト：

สุชาติ สวัสดิ์ศรี, “งู”

初出：มติชนสุดสัปดาห์, กุมภาพันธ์, 1984.

再収：ความวาง รวมเรื่องสั้นหลังยุคแสงหาของผู้เขียน “ความเงิบ”, สำนักพิมพ์สามัญชน, กรุงเทพฯ, 2003, pp.45-55.

〔解説〕

最初の四つの短編の作者であるシーブーラパー（本名クラップ・サーイプラディット、一九〇五〜七四）はタイの近代文学の父として親しまれている。またその活動は作家にとどまらず、リベラルなジャーナリストとして民衆の啓蒙活動に挺身した人物でもある。人類にとって重要な人物や事件を毎年顕彰してきたユネスコが、その長年にわたるタイ文学とジャーナリズムへの貢献に対し、生誕・没後百〜二百周年を迎えた、賞賛さるべき四十一人の偉人の列にタイのシーブーラパーを加えたのはすでに二〇〇五年のことになる。

シーブーラパーの人と作品が日本で知られるようになったのは、『世界短編名作選東南アジア編』（新日本出版社、一九八一）に、短編「結婚までの日々」（松山納訳）が収載されて以降である。その後は、未完の長編『未來を見つめて』（安藤浩訳、勁草書房、一九八一）、長編『絵の裏』（小野澤正喜・ニッター訳、九州大学出版会、一九八二）、『ナーンラム』（大同生命国際文化基金、一九九〇）収載の三短編（吉岡みね子訳）、長編『罪と

の闘い』（宇戸清治訳、三短編を含む、大同生命国際文化基金、二〇〇八）、短編「いとこ」（宇戸優美子訳、『東南アジア文学十一』、二〇一三）で主たる長編・短編が紹介された。今回訳出した短編は上述の『罪との闘い』に収載予定であったが、総頁数の都合で見送られたものである。そのまま死蔵するには惜しいという気持ちがあり、わがままを言って本号に掲載していただいた。シーブーラパー作品は日本語で全集の形で刊行されるべきだというのが常日頃からの私見であり、今後はその作業を本格化したいと考えている。

後半の二つの短編の作者であるスチャート・サワッシー（一九四五〜）はタイ文芸界でその名を知らぬ者のない作家、詩人、評論家、画家、編集者である。タマサート大学の学生時代から軍事政権に反対するアクティビストであった彼は、その後民主革命のイデオロギーを主導した『社会科学評論』や、総合文芸誌『本の世界』を筆頭に多くの時代先取的な刊行物の編集を手がけた。また他方では、新人作家の登竜門となった「チョーカーラケート賞」の創設と運営、同名の短編集の発行を通じて現代タイ文学の発展に長年にわたって尽力してきた。現代活躍中の中

堅、若手作家の多くはスチャートが育てたといっても過言ではない。一九七九年から二〇〇〇年にかけて、トヨタ財団の「隣人をよく知ろうプログラム」によって計二十六冊のタイ小説や短編集の邦訳が出版されたが、その作品選考で中心的な役割を果たしたのも彼である。

シーブーラパーは一九五八年に文化交流使節団の団長として北京訪問中に起きたサリット元帥によるクーデターに接し、そのまま中国に亡命する道を選ばざるを得なかった。その当時のスチャートの年齢は十八歳であるから、両者がタイで相まみえることはなかった。それでも両者を繋ぐ接点はある。それは、上述のユネスコによるシーブーラパー顕彰をきっかけに、タイ国内でその生涯と業績を国内外に広めるための十六もの委員会が設置され、スチャートが出版部門の編集長となって、散逸していた昔の文芸誌『スパープ・ブルット（紳士）』（シーブーラパー主宰、一九二九〜三〇）の収集、編集、一冊にまとめた復刻本の刊行を成し遂げたことである。当時の貴重な写真も収めた復刻本『文芸界の群像・スパープ・ブルットの短編』（出版委員会編、二〇一〇）は一一一九頁の大冊である。

これほど優れた業績を持つスチャートではあるが、彼の

人と作品は残念ながら日本ではあまり知られているとは言えない。これまでに邦訳された作品はわずかに、『現代タイ国短編小説集上巻』（勁草書房、一九八二）中の短編「玩具の列車」（岩城雄次郎訳）を除けば、あとは計十一の詩のみである。訳者は以前から彼の小説世界をもっと日本人にも知ってもらいたいと希求しており、今回、シーブーラパーの短編と比較できる形で紹介させていただいた。「線路の両側」に見るように、スチャートの初期作品が七〇年代に一世を風靡した「生きるための文学」の系譜上にあるのは確かだが、「蛇」のような実存主義的な内容の短編もいくつか書いていて、民衆啓蒙を中心課題としていたシーブーラパーとはまた違う感性を持った作家であることを読み取っていただけだろう。なお、スチャートの妻でもある作家シーダオルアンにも「からみあう蛇」（宇戸優美子訳、『東南アジア文学十三』、初出一九八六）という似た題材の短編があり、書かれた時機も二年しか違わないことから、夫婦間で同じ題材を巡って競争を試みようとする意図があった可能性もある。こういったことを推測できるのもまた翻訳の楽しみの一つである。（訳者）